

報 告

[立教大学経済学部 国際部会ワークショップ]

合評会 郭洋春著『100均資本主義：脱成長社会「幸せな暮らし」のつかみ方』（プレジデント社、2022年）を評す

日 時：2023年11月22日（水）16：00～18：00

会 場：立教大学（池袋）12号館4階 経済学部共同研究室

プログラム：

- ◇ 郭 洋春（立教大学・経済学部）著者概説：「私が考える“100均資本主義”の姿」
- ◇ 石井優子（立教大学・兼任講師）書評：「「低欲望」・「脱成長」を考える」
- ◇ 巖 成男（立教大学・経済学部）書評：「成長しなくても“幸せ”な社会」は持続可能か？」
- ◇ 著者リプライ（郭 洋春）
- ◇ 全体討論



はじめに

本日の立教大学経済学部国際部会ワークショップ研究会では、本学部教授郭洋春氏の新著『100均資本主義：脱成長社会「幸せな暮らし」のつかみ方』（プレジデント社、2022年）の出版を祝い、その内容について深く学ぶと同時に、異なる学問分野から本書の主張をどのように捉えられるのか、について議論したい。

21世紀に入ってから20年余り、私たちが生きるこの資本主義が抱えているさまざまな弊害がますます顕著になり、既存システムの修正と改正を通じてより良い（正しい）資本主義として継続していくか、それとも脱資本主義と言える新しい社会経済システムを構築すべきか、の議論が盛んに行われている。本書は、この大きな転換点にさしかかっている資本主義をどのように考え、どのように生きるか、について「消費様式の変化」を中心に議論を展開している。もしトマ・ピケティの『21世紀の資本』が資産と所得の分配様式をめぐる21世紀の資本論であり、斎藤幸平の『人新世の「資本論」』が気候変動と環境問題から出発した21世紀の資本論であるならば、本書『100均資本主義』は消費様式を切口にした21世紀の資本論として位置づけられると評することができる。

本日の研究会で評論を行う二人の評者の学問分野は異なる。すなわち流通論の視点からアジア経済を研究している石井優子氏と政治経済学の視点からアジアと中国経済について研究している巖成男氏が、それぞれの立場から本書に対して評論を行い、著者と他の参加者を交えて虚心坦懐な議論を行った。たくさんの議論が展開され、楽しく刺激的な知的交流ができた一方で、日本経済と資本主義の病に関する診断と処方箋についてはまだまだ多くの研究と議論が必要だと感じさせられる研究会であった。

以下は、プログラムに示した報告順に行われた研究会の議論を文章にしている。

私が考える“100均資本主義”の姿

郭 洋春（立教大学）

今日は拙著につきまして合評会を開いていただき、ありがとうございます。特に石井先生は、わざわざこのためにお越しいただき、本当に申し訳ないというか、ありがとうございます。私はそんなに話すことがないので、10分ぐらいで終わってしまいたいと思います。

まず、なぜこの本を書こうと思ったか。

というのは、日本が失われた10年、20年といわれ、30年ぐらい経ち、景気が悪いと、世間ではデフレと言われています。普通、これだけ長くデフレ状態、あるいは低賃金、賃金が上がらないという状態が続けば、世界的に見ると暴動とか政権交代が起きておかしくないと思います。

例えば、昨年だったと思うのですが、イタリアで政権交代が起こったときの最大の理由は、やはり経済停滞だと言われています。どの国でも経済がおかしくなると、政治に影響を及ぼしたり、あるいは社会秩序が乱れたりします。ところが、日本の場合は、確かに国民一人ひとりが、家計が苦しいとか、政府にもっと景気対策をして欲しいと言っているにもかかわらず、さらに政府が様々な不祥事を起こしているにもかかわらず、選挙（2021年衆議院選挙）をすると逆に自民党が圧勝するという、ちょっと言葉が悪いですが、異常というか世界からみると考えにくい状況がずっと続いています。

そこで、なぜそういう状況が日本では継続して起きるのか、ということを考えてときに、低賃金社会でも、それを支える業態、あるいは人々の消費を支える仕組みがあるがゆえに、そのような状況が生じているのではないかと考えました。

その中身が何かと考えると、要するに100円ショップを象徴的なものとした、いわゆる激安ショップが日本では非常に多いという点に注目できます。

身近なところというならば、回転寿司やドン・キホーテのような店舗が非常に人気を集めていますし、あるいはニトリといった家具屋およびインテリア用品小売業が広がっている。さらにはワークマンも挙げられます。その中でも一番最たるものが、いわゆる100円ショップであるといえます。

バブルの時代には、どこへ買い物に行くかという、まずは百貨店などでありました。それがコンビニによって駆逐され、そして今100円ショップに駆逐されていく。今回西武百貨店がヨドバシホールディングスに土地と建物を売却するという状況になったように、百貨店業界ではどんどん閉鎖が進んでいる。100円ショップが百貨店すらも侵食する、そこで買えないものはない。100円ショップでなくても、ニトリとかしまむらといった、そのような店舗で買われてしまう。やはりバブルの頃の、いわゆるラグジュアリーな店舗が、全部格安ショップに置き換えられてい

く。こういう社会とは、資本主義ではあるが、従来の資本主義ではない、まさに岸田総理（当時）がいうところの「新しい資本主義」であり、これが日本発で生まれつつあるんじゃないか。その典型的なものが100円ショップだということで、100均資本主義というものを考えました。

この『100均資本主義』という本は、100均のマニュアル本あるいはガイドブックのような印象を与えてしまっていますが、そうではありません。あくまでも資本主義が、いわゆる脱成長とか、均衡型社会とよくいわれますが、そういうものの延長線上で、あるいはそれに類するものとして資本主義が変質しつつあるという事を説明しています。

ただ、私が脱成長をあまり強調しないのは、120ページから121ページの表で示したように、今の日本というのは、その全てが100均資本主義になっているかという、そうではないと考えています。まだ、いわゆる成長至上主義、NHK的な言い方をすれば、欲望の資本主義が蔓延っていて、でもそのような社会では生きていけない、そうではない社会を追求する、そのような人たちが生まれてきていると考えており、そこで今の日本社会は二階建てバス状態ではないかと考えました。

二階建てバスというのは、1階は限られたスペースになっていて、そこには成長至上主義から抜け出たいと考えている人たちが乗っており、二階はオープンスペースとなっていて、成長至上主義的な人たちがそこには乗っていて、さらに高みを目指そうという人たちが乗っています。さらに、一階の狭い部分には、もうそんなに成長を求めなくてもいいのではないかと考えながらも、それでもその成長至上主義の中で生きていく人たちが同居するという二つのグループがいると考えています。そして、徐々にその一階部分が二階建てのところを侵食しながら、一つの方向に向かって走っている。

今の日本社会はこのような状況、すなわち過渡期状態にあって、この過渡期状態がこれからも相当長く続くんじゃないかなと考えています。つまり、所得格差が生まれている以上、アッパークラスの人たちの生活様式と、そこを目指したいという人たちは、これからも相当の期間にわたって消えないだろうし、そこから別の道に行きたいという人たちもどんどん増えていく。ということで、日本資本主義は、このような二極化の中で、一つの方向に向かって進んでいくんじゃないかと考えています。

問題は、この100均資本主義というのが結局はどのような社会構造なのかということです。成長至上主義は、モノづくりを中心として、そこに高付加価値のものをつくっていくことによって発展していくという従来のメカニズムでした。一方、この100均資本主義というのは、どのようなメカニズムなのか。今回100円ショップを挙げたように、例えば業界トップのダイソーは、7万6000アイテムを有しているとされます。コンビニですら、最大手のセブンイレブンが2万6000アイテムほどしか有しておらず、実にダイソーはその3倍以上ものアイテムを持っています。さらには、ダイソーでは月に600から700アイテムの新商品が出てきます。これを作っている人たち、これを考えている人たちは誰か。そのほとんどは、この100均ショップに卸

している中小零細企業でアルバイトをしている人たち、もっというならば、パートやアルバイトの主婦たちが、実はアイデアを商品化し、新しい商品を開発しています。

このような観点からいうと、この100均資本主義、100円ショップの商品の特徴は、安いだけでなく、おもしろグッズとか便利グッズであるという点にあるといえます。

すなわち、こんなものがあつたらいいなという願望や、アイデア商品を使うとこんなことができるんだ、という一種のクリエイティブな業態になっているのが、実はこの100円ショップであるといえます。そして、今日本の大手の輸出産業の大企業が国際競争で負けている理由が、高付加価値な商品を作れていないという点にあり、クリエイティブな商品では、中国、韓国、あるいは東南アジアの国々にほとんどで負けてるからであるといえます。

しかし、100円ショップで売られている便利グッズやおもしろグッズというのは、非常にクリエイティブな商品であり、これを一般の人たちがどんどん作っているということを考えると、今この100均資本主義の主役というものは、実はそういう生産現場、特に主婦の方々であり、彼女らが非常にクリエイティブな存在になってるといえます。そこから、これからの日本は、モノづくりで国際競争に勝つのではなく、クリエイティブな部分を強みとして勝ち上がる、という新しい資本主義のロールモデルを作ることができるのではないかと考えています。

というのも、世界的な日本発のビジネスモデルがあるかという点、実はありません。よくトヨタの生産方式が挙げられますが、あれはトヨタがやっているだけであり、なぜトヨタが強いのかを説明する際に、トヨタのカンバン方式というのがあるのが出るのであって、世界的に広がっているわけではありません。ところが、この100円ショップや回転寿司は、日本発のビジネスモデルで、これが実は世界中に広がっています。アジアはもちろんのこと、ヨーロッパに行っても回転寿司があります。100円ショップをみても、世界的に均一価格のショップが、アジアにも、アメリカにも、ヨーロッパにもあります。

つまり、日本が作り出したビジネスモデルとは、実はこのような回転寿司や100円ショップといった、低価格な商品、あるいはアイデア商品を売り出すものであり、日本はここに活路を見出すべきだと思います。また、従来型のいわゆるモノづくりで戦おうとするような現在の財界、あるいは政界の考えでは、日本は早晚行き詰まってしまうかもしれません。ということで、私がこの本を書いたのは、こうした日本の資本主義のまさに新しい形が、100円ショップに代表される激安ショップにみられるのではないかと、ということにあります。

この本に対する外部の評価についてお話しすると、東京新聞の書評欄（2023年2月）に、生活評論家といわれている萩原博子さんが比較的好意的に書いていただいている、他にも日刊ゲンダイでは顔写真付きで紹介していただいています。アカデミズムの世界では、国際アジア共同体学会で、岡倉天心記念賞をいただけると聞いております。このように、社会的にもいろいろ評価をいただいています。

ということで、これぐらいで私からの紹介はよろしいでしょうか？

書評1

郭洋春著『100均資本主義：脱成長社会「幸せな暮らし」のつかみ方』における「低欲望」・「脱成長」を考える

石井 優子（立教大学・兼任講師）

はじめに

失われた30年という長期の経済停滞を経験した日本経済では、今もなお賃金は上がらず、さらには円安や物価上昇と生活への不安は高まっている。こうした中、我々の生活を支えているのが100円ショップなどの激安ショップであろう。本書は、この低賃金と100円ショップという昨今の日本経済の特徴を「100均資本主義」という新たな枠組みでとらえ、転換期の日本経済を解説しようと試みている。この既存の経済理論が通用しない特異な資本主義は、人々が利潤ではなく納得解を追求するという心豊かな社会を創造してくれるという。新たな資本主義の枠組みを捉え、豊かさの問い直しともいえるこの難題について、マルクス経済学や景気循環論などのアカデミックな視点やジョージ・オーウェルの世界観からの言及に加え、スターウォーズ、シン・ゴジラなどのたとえやこんまりメソッドなどの身近な例で、わかりやすいユーモアに富む解説が行われており、学部の学生や経済学の専門知識のない読者でも十分に理解が深められる1冊となっている。

1. 本書の概要

本書の概要を紹介する。本書は5章構成となっているが、本編に先立つプロローグでは、著者が本書の出版に関連して、編集者とともに銀座の100円ショップや高円寺の激安飲食店を視察した様子が紹介されている。庶民的な生活空間での物販や飲食が激安ショップに席卷されているだけでなく、高級ブランドが並ぶ日本の一等地の銀座に100円ショップやファストファッションなどが進出しているのである。著者自身の実見を通して、いかに激安ショップが日本経済に浸透し、重要な役割を果たしているか我々も実感した上で、本編に入ることができる。

第1章「なぜ、100円ショップは儲かるのか——資本主義の究極の利潤追求モデル」では、100円ショップの成長要因が整理されている。日本発の100円ショップはいまや日本にとどまらず海外にも進出しており、単に安価で品数が多いだけでなく、アイデア商品、環境配慮型商品など新たな価値を付加した多様な商品を展開している。著者はこの100円ショップを「小売業のディズニーランド」と評し、多くの具体例を示しながら、我々消費者を常にワクワクさせてくれるその業態の魅力を紹介している。そして、いまや世界的に台頭する100円ショップ

のビジネスモデルを究極の利益追求システムであると指摘する。とりわけ、100円ショップは営業利益が高いという。その要因は、企業が徹底的なムダの削減と消費者ニーズへの対応を行っている点だとし、7つのポイントから説明している。その中でも特に重要なのは大量生産・大量仕入れ・大量販売システムに関する指摘であろう。海外で製造される商品については、例えば「100円ショップのふるさと」と言われる中国の義烏市のような流通拠点の間屋を窓口にして、中国全土のメーカーに一斉に発注し、大量に仕入れることで単価を抑え、粗利益を高めることができるという。またこの際、問屋やメーカーに返品リスクを負わせず、完全買い取り制であることも低い納入価格を実現できる要因だという。著者は、こうしたシステムをいわゆる工程間分業を前提とした国際SCM (Supply Chain Management) ではなく、完成品の国際PCM (Product Chain Management) と呼び、グローバリゼーションをうまく活用した大量生産・大量仕入れ・大量販売システムだと説明する。また、100円ショップの商品は低コストの海外で生産されたものだけでなく、日本製の商品もあるが、中小企業の製造能力の余力を活用する形で固定費を下げ、仕入れ価格の低減を実現しているという。このようなビジネスモデルなど100円ショップの大局的な整理のみならず、各社の経営戦略や環境配慮型商品など身近な事例も紹介されており、読者の理解を助けてくれている。

第2章「“生活革命”をもたらした新型コロナウイルス」では、自己実現型生活への移行が100均資本主義の実現を加速させたという。新型コロナウイルスの蔓延で、我々は「ステイホーム」を余儀なくされ、おうち時間が増大した結果、DIY、おうちご飯（自炊）、キャンプなどへの需要増加が顕著にみられた。こうした生活様式の変化を支えたのが100円ショップや格安のホームセンターである。これまでの新自由主義的な成長至上主義においては、物質的な豊かさこそが唯一の価値観であり、そこから逸脱する人を「負け組」と排除さえしてきた。しかし、この失われた30年の中で、他者との違いを尊重し、自分なりの価値を追求し、自己実現していくという100均資本主義の萌芽が見え始めていた。そして、コロナ禍というこれまでと違う困難な環境の中、人々は知恵を絞り、自己実現型の生活スタイルを取り込むことになった。すなわち、100均資本主義的な生活革命が加速したのである。

第3章「21世紀は100均資本主義の時代」では、現在の日本社会の変容が「100均資本主義」という著者独自の枠組みで整理されており、著者が提示する主題を理解するために最も重要な章である。まず「100均資本主義」とは、不況下の低賃金と激安ショップに特徴づけられ、資本主義でありながら最低限の利潤しか生みださない新しい経済システムのことであるという。また、著者は、過剰貯蓄・過小需要というカネ余りの日本社会の現状を Dream (夢), Desire (欲望), Demand (需要) が失われた「Dのない社会」と説明する。物質的な成長至上主義が極限に達し、人々の欲望が満たされただけでなく、最終的にはそれがむしろ減退する低欲望社会へと転換しており、資本主義の変質を意味するという。ケインズが言うように欲望が資本主義の推進力ならば、日本経済は推進力を失った資本主義であるというのだ。ただし、夢や希望

がなく、殺伐としているわけではないという。Dのない100均資本主義では、低賃金社会を生き抜くために他人に依存するのではなく、それなりの品質、それなりの付加価値の製品を利用し、自分で考え、自己実現していく。そうした工夫によって満足できる心こそ「豊か」なのであり、Dのない資本主義こそ成長至上主義から抜け出すための一つの道だと指摘している。

そして、著者は、このDのない社会が広がりつつある現在の日本社会に「3つの階層」と「2つの資本主義」があると整理する。第一階層は、高位の成長至上主義的な経済のあり方を追求している層で、一部の政治家や経営者を指す。第二階層は、中位の成長至上主義で、第一階層が経営する企業で働き、満足しているわけではないが、他に選択肢がない人々を指す。第三階層は、脱成長至上主義で、現状に不満を持ち、Dのない社会における新しい価値観を模索する人々を指している。さらに、2つの資本主義とは、グローバル資本主義とも言い換えられる「欲望の資本主義」とDのない低欲望の資本主義、すなわち「100均資本主義」のことである。こうした状況を「二階建てのオープントップバスに、3つの異なる考え方を持つ人たちが乗り込んで、同じ方向に進んでいる」とし、二階の欲望の資本主義には第一階層が、一階の低欲望の資本主義には同じ料金を払っているにもかかわらず第二階層、第三階層がぎゅうぎゅうに乗っている状態であるという。しかし、脱成長主義的生活を实践する層の拡大によって、「Dの逆襲」ともいえる一階からオープントップの二階部分への突き上げが強まり、既存の社会構造に揺るぎが生じているという。

第4章「100均資本主義の未来」は、100均資本主義で築かれる未来についての言及である。著者は、100均資本主義の下で築かれる社会を、新しい価値観の創造を通して、人々を物欲から解放する人間性豊かな社会であると期待を寄せており、それには「納得解」と「自己肯定感」が重要だという。つまり、物欲社会と決別し、自分が納得のいく豊かな生活を送るということだ。これは、タイのプミポン国王のアイデアである「足るを知る経済」や日本の質素儉約という伝統的な価値観とも符合するだけでなく、SDGsとの親和性もあり、SDGsの実現に有効であるという。

第5章およびエピローグは、本書を総括するとともに、心豊かな社会の実現に向けて、「疑問を持ち、尖がり、行動する」ことの重要性が若者へのエールとしてつづられている。ここで著者は「ゆでガエル理論」という例えで日本社会を揶揄している。つまり、かえるを熱湯に入れると、その熱さから逃げ出すが、常温の水から徐々に水温を上げていくと、逃げ出すタイミングを失い、最後は死んでしまうというものだ。これは現在の日本社会そのものであり、そこから脱却するために主体的に行動することが重要なのだ。100均資本主義そのものの価値や可能性と同時に、その根底にある、人々の自由、主体性が何よりも重要であるという指摘だととらえることができよう。

2. 本書からの気付き

次に、本書を通した気付きを述べる。

まず、「低欲望」の評価についてである。私たちが失われた30年の間に、購買意欲がない、働く意欲がないなど、経済の成長にとってネガティブととらえられてきた現象を、本書では自己実現的で持続可能な社会のためにポジティブにとらえ直されており、貴重な示唆だといえる。本書で指摘があるように、そもそも低欲望は、低消費、低投資を招き、縮小再生産化した社会となっていく。したがって、人々の消費をいかに喚起していくのが経済の重要な論点である。しかし、それはあくまでも物質的豊かさという価値観にとらわれたものであり、心の豊かさという価値観でとらえればならぬネガティブな要素ではないのだ。また、持続可能な社会の実現に向けた消費行動という点、「環境配慮」、「エシカル消費」などのいわゆる意識の高い、ハードルの高い活動ととらえられがちであり、金銭的負担も通常の消費に比べて高い傾向にある。しかし、この低所得社会で100円ショップを利用した身近で気軽な創意工夫が、足るを知る持続可能な社会の実現につながるというのだ。つまり、100均資本主義の価値観は新しい社会への変革の一步を軽いものにしてくれるといえるだろう。

次に、第1点目の気付きとも関連するが、著者の「豊かさの問い直し」の姿勢についてである。本書では、物質的な豊かさではなく質的な豊かさを追求する100均資本主義の価値観が「足るを知る経済」の概念と通ずると述べられているが、アマルティア・センのケイパビリティ概念との共通点も見られる。ケイパビリティ・アプローチでは、どのような生活を選択できるかという「自由」の拡大が豊かさにつながるとされている¹⁾。一方、著者も、Dのない社会の「納得解」と「自己肯定感」という新しい価値観を説く上で、「自由」を重視している。つまり、自由な発想で自分なりの工夫をした生活の中で得られる納得感こそ豊かさだというのだ。また、道徳的価値観の取り込みにも親和性が見られる。著者は、資本主義が「経済成長」と「富への欲望」を道徳的に是とし、飽くなき欲望に突き進んでいった結果、「世界中に誤った経済の道徳観が広まった」と批判する。一方、センは物質的豊かさという画一的な価値尺度を批判し、人々の多様な社会環境まで取り込んだケイパビリティ・アプローチを提示し、「経済学に倫理観を持ち込んだ」と評価される。つまり、両者ともに、量的な拡大こそ是とされ、倫理的正しさが欠落してきた既存の経済学を批判し、多様な価値観が許容される心豊かな社会の実現を迫っている。また、これまで著者が、理論の体系化を試みてきた新しい学問分野に「平和経済学」がある。平和経済学とは、量的「成長」一辺倒の開発主義から質的「発展」による持続可能な社会を実現するために、既存の開発経済学の再構築を試みるものである。つまり、非成長を

1) アマルティア・セン著、池本幸生、野上裕生、佐藤仁 訳『不平等の再検討 潜在能力と自由』岩波書店、1999年7月

停滞ととらえるのではなく、「成長なき発展」を目指すという²⁾。このように、著者の分析視点には、常に豊かさを問い直す姿勢が貫かれ、新しい価値観で本質的に豊かな社会を創造していこうという熱意があふれており、経済停滞という閉塞感が蔓延する現代に希望の灯りをともしているように感じる。

最後に、「100円ショップのふるさと」義烏の飛躍についてである。本書には、著者が義烏に現地調査に赴いたとあるが、大学院時代の評者も著者の引率の下その現地調査に参加している。本書にある通り、広大な敷地面積の流通市場に日本の店頭に並ぶであろう100円ショップの商品が所狭しと並べられており、買い物欲を刺激されたことを記憶している。しかしながら、当時の義烏は、空き地や建設現場も多く、周辺の交通インフラの状況などからしても、まだまだ発展途上の地方都市という印象であった。ところが、この100円ショップビジネスの成長を背景とし、流通のみならず物流拠点として著しい発展をとげた。本書と重複する点もあるが、簡単にその成長ぶりを追記したい。まず、なんといっても中国政府が国家プロジェクトとして進める「一带一路」の起点に指定されたことは、義烏の注目および期待の高さを象徴しているといえる。2011年には、実質的な貿易特区である総合改革試験区が設立されたが、これは県レベルとしては初の認可である³⁾。また、2014年にはユーラシア横断鉄道コンテナ輸送である義新欧が開通し、中国から欧州までの鉄道一貫輸送が実現した。さらに、2015年には義烏国際市場に隣接するインランドポート「義烏港」が供用開始され、義烏と寧波を通る鉄道新線では中国初のダブルスタック（二階建て貨物列車）の導入が予定されるなど、シー&トラック、シー&レール双方のインフラ整備がすすめられている⁴⁾。このように義烏市の成長は、100円ショップのビジネスモデルや一带一路という国家プロジェクトへの取り込みを背景とした一地方都市の成長事例にとどまらず、環境配慮型の経済が求められる昨今において、とりわけ鉄道を利用した内陸都市の物流・流通拠点としての可能性という点でも示唆に富む事例と言えよう。

3. 論点と課題

最後に、論点と課題を3点述べる。まず、脱成長主義の評価についてである。本書でいう第三階層の人々は、100円ショップを利用し脱成長至上主義を実践する人々で、彼らの低欲望的な価値観は「足るを知る経済」やSDGsとの親和性が極めて高いという。しかしながら、この第三階層の人々の消費心理ははたして均質なのだろうか。評者は、第三階層は以下のような3つのグループに細分化できるのではないかと考える。一つ目は、使い捨て型消費を行うグルー

2) 郭洋春『開発経済学 平和のための経済学』法律文化社、2010年2月

3) JETRO ビジネス短信2011年5月19日

4) 李瑞雪「商業集積の発展とロジスティクス・クラスターの形成 (II)：義烏の事例」『経営志林』55巻1号、法政大学経営学会、2018年4月

プである。100円ショップと同様に低価格ビジネスを展開するファストファッションの台頭によるアパレル市場の状況を見てみると、国内市場規模は1990年の15.3兆円をピークに減少し始め、2022年には8.7兆円にまで縮小しているが、その間、国内供給点数は1.8倍以上に増加したという⁵⁾。これは、安価となった商品をワンシーズンだけと割り切って買うというような使い捨て型消費が増えている証左と言えよう。100円ショップを利用する層には、この使い捨て型の消費心理を持つ人々も含まれており、脱成長主義的消費と一見同質の消費に見えるが、著者の言う低欲望型の消費とは性質を異にするものではないか。第2は、脱成長及び低欲望型の消費をするグループであり、これが著者の言う第三階層にあたると考える。彼らは、身の丈に合わない量的成長からの脱却を試み、100円ショップ商品を利用したDIYなどによって納得解を得ている人々である。第3は、同じ脱成長・低欲望型であるが、環境や人権への配慮など倫理的な価値観を重視したいいわゆる「意識の高い」消費を行うグループであり、100円ショップ商品よりもむしろフェアトレードやエシカル消費などへの関心が高いと思われる。彼らは、100均資本主義と共通する価値観をもつものの、倫理観が極めて高く、一般的に高価格な商品への支出が可能であることから、オープントップバスの二階の住人ともとらえられる。このように第三階層をその消費の志向によって細分化することで、現在の社会構造をさらに正確に把握することができると思う。

第2の論点として、第1の論点と関連するが、100均資本主義ではエシカル消費をどうとらえるのかという点である。100均資本主義的消費とエシカル消費は、脱成長的で低欲望という点は共通するが、基本的な理念およびそのことからくる価格設定に大きな違いがある。100円ショップ商品は、100円という低価格で気軽に豊富な商品を消費者が楽しめるもので、消費者重視型の商品が展開されている。一方、フェアトレードなどを含むエシカル消費は、生産者支援、環境配慮、伝統技術の保護など社会的課題の解決を重視した、まさしく倫理的な消費である。こうした配慮が価格に転嫁されるため一般的な商品に比べ高価格である。このようにエシカル消費は、同じ低欲望でありながらも、常に100円で提供する100円ショップのビジネスモデルとは理念も価格も異なるもので、100均資本主義の枠組みではどのように評価されるのであろうか。上述の第三階層の分類と合わせて、さらなる整理を待ちたい。

第3の論点は、100均資本主義を支える国際PCMシステムは持続可能かという点である。100円ショップのビジネスモデルは、徹底的なコスト削減によって高い利益率を出しているというが、それはメーカーや現場の労働者などへのしわ寄せが大きいことを意味するのではないか。例えば、正社員比率が著しく低いとあるが、企業側にとっては、安い賃金で雇用調整も容易であり、人件費の大幅な削減につながるが、労働者サイドからすれば、低賃金の不安定な雇用環境に他ならない。また、100円商品とは言え、メーカーの初期投資は多額になるが、低価

5) 経済産業省製造産業局生活製品課『繊維産業の現状と政策について』2024年2月

格ゆえに利益が出るまでには数年かかる商品もあり、マルクスの言う「命がけの跳躍」だという。もちろん企業として当然の投資行動ではあるが、低価格商品の非常に少ない利益のために命がけの跳躍をしなければならないということ自体がメーカーにとっては大きな負担である。さらに、昨今では、世界的な燃料高や物価高および円安への対応、SDGsなどの社会的要請に応じた商品開発への追加的費用などもしかかる。100円という低価格の中で、このようなコストに見合った対価が国際PCMの末端まで行き届くのか懸念される。本書でも、中小企業に安い仕入れ値を設定することに対して「弱みに付け込む」と批判もあるという記述もあるが、今後さらに国際PCM自体の課題や持続可能性の分析も期待したい。

おわりに

長引く経済停滞の中、賃金は上がらないのに、なぜ人々の生活水準は維持されているのか。本書は、著者が現代社会に感じたこの違和感を「100均資本主義」という新しい枠組みで解明しようと試みた意欲的な挑戦であり、副題の『脱成長社会「幸せな暮らし」のつかみ方』にあるように、人々が脱成長的及び脱欲望的な心豊かな生活を送るための指南書ともいえる。詳細な科学的分析が途上である点もあるが、新たな時代の整理として非常に示唆に富むものであり、今後学術的研究として昇華されることを願う。

書評2

郭洋春著『100均資本主義：脱成長社会「幸せな暮らし」のつかみ方』における「成長しなくても“幸せ”な社会」は持続可能か？

巖 成男（立教大学）

1. はじめに

21世紀の今日、私たちが生きているこの資本主義社会は明らかに病んでいる。実態経済とかけ離れた金融資本の跋扈に伴う不安定性の拡大と経済成長率の停滞、果てしない格差と不平等の拡がりに伴う生活困窮と将来不安の増大、そして国内における社会経済的矛盾の国外転嫁に伴う国際秩序の動揺と武力衝突の多発など、カネ・モノ・ヒト、さらには知識（技術）の資本主義的再生産システムは大きな転換点にさしかかっていると言える。このような深刻な病を抱えている資本主義に対しては、多くの社会学者たちがその修正と改善について議論し、さらに一部では根本的な改変——すなわち脱資本主義——までが謳われている。

本書『100均資本主義』が示そうとする現代資本主義の姿は、その副題「脱成長社会」という呼称に含まれる二重の意味から読み取ることができる。第一は、現在の資本主義経済システムはもはや成長しない、所得が増えない（将来的にも増えるとは期待しない）——すなわち成長の軌道から脱している持続可能性を欠く惨憺な資本主義である。第二は、従来の「蓄積せよ、成長せよ」の資本主義的価値観を捨て、成長しなくてもいい（大丈夫な）社会——すなわち「大きくて、美しい将来展望・ビジョン」に惑わされることなく、慎ましくても「満足できる、幸せな」暮らし方が見つけられる希望に溢れる資本主義だ。

読む人にとって相異なる21世紀の資本主義像が展望できるという意味でも本書は示唆に挑んだ著作であり、何よりも私たちの日々の生活を支えている100円ショップ、激安ショップに対する考察を通じて日本経済と資本主義の過去と現在を分析し、将来を展望しているから親近感もあって、非常に読みやすい。ご一読をお薦めしたい。

以下では、本書の主な内容を概括したうえで、政治経済学（Political Economy）の視点から中国、アジアの経済発展を研究している評者の立場から評論を行う。

2. 本書の概要

本書は、執筆の契機と意図を紹介した「プロローグ」に、100円ショップ、激安ショップの日本および世界的拡がりにかかわる内的（ショップ側の企業努力）、外的（社会、経済的環境）要因、さらにはその拡がりを変える資本主義的生産様式と生活様式について検討した五つの章、

および100均資本主義が示唆している21世紀の脱資本主義の展望 (p.185) を提示したエピローグから構成されている。

最初のプロローグでは、本書執筆の契機と意図の説明として、「飽きない欲望 = 成長至上主義と、低欲望 = 脱成長主義」が（可笑しくも面白く）併存している日本の銀座で、日本経済の変容と特質を指摘し、日本ならびに資本主義社会における欲望の資本主義から低欲望の資本主義への潮流を読み取る。

第1章「なぜ、100円ショップは儲かるのか——資本主義の究極の利潤追求モデル」では、成長と所得の停滞が続くなか好況に沸く100円ショップ（激安ショップの代表格）の経営秘訣を紐解く。100円という安価な商品を揃えながら、「安さ」だけではなく、無限の選択肢と可能性を導き出せる「ワクワク感」を提供することで消費者を惹きつけて好業績を上げている100円ショップビジネスの「究極の資本主義的利潤追求システム」を解説している。それは、①グローバルな大量生産・大量仕入れ・大量販売システム、②情報技術を駆使した管理効率化（POP：Point of Sale システムの導入）、③究極の人件費削減システム（非正規雇用依存）、④広告宣伝費の節約、⑤流通コストの節約、⑥大量の商品開発と投入、⑦行動経済学に基づく販売戦略（ついで買いの誘導）から構成されるもので、業界全体が基本的には類似したビジネスモデルであるが、企業別の特徴も存在することを説明している。

第2章「“生活革命”をもたらした新型コロナウイルス」では、2020年以來のコロナパンデミック下で人々の屋外行動と生活が制限され、おうち時間が増加したことがもたらした生活様式の変化——例えば、DIY、一人キャンプ、家料理、地方移住など——が、自己実現生活の可能性を拡げ、発想の転換に基づく暮らし方の多様性と自らの価値観を具現化する機会が増加したことを指摘する。さらに「不安や不満」を抱えながらも「不便」に対応しながら社会秩序を保つ日本人（社会）は、「政治的、マクロ的環境を変えよう」よりは、「個人的、ミクロな生活様式の変化で自己満足を高めよう」を選択しているのだが、それが持続できるには従来の「減点型の完璧主義」の製品開発・生産様式に固執せず、世界の先進国一般の「加点型のいいかげん主義」とのハイブリッドでも言える「適切な良い加減」が求められている (p.99) と説く。

第3章「21世紀は100均資本主義の時代」では、21世紀の資本主義が、従来の資本主義（の成長）の推進力の人間の物欲が減少し、縮小再生産化した社会 = 縮小均衡社会へと変質している (p.107) と断言する。さらに、需要の飽和とD (Dream, Desire, Demand) のない社会となった日本資本主義が、欲望もなく、資本 = 会社に縛られたくもない人々を増やしていることから、真の意味での「資本による労働の疎外」から解放される人間を生み出している (p.129) 可能性を導き出している。もちろん、全ての日本人が無欲で、日本経済（社会）が完全に脱成長志向の「100均資本主義」と化したわけではなく、依然として強い成長志向の「グローバル資本主義」も存在して、日本には2つの資本主義が混在している。そして筆者は、今日の100均資本主義の興隆が成長至上主義、成長神話からの脱却を意味（示唆）している (p.122) と

主張する。

第4章「100均資本主義の未来」では、伝統的に「清貧」を信条とする日本の100均生活で得る「納得感」と「自己肯定感」が創り出す新しい価値観——労働からはたらく、競争から協調、所有から共有、信用から信頼への転換——の出現を描いている。その帰結として従来の資本中心の成長社会から人間中心の脱成長社会（p.143）への転換が行われ、剥き出しになっている資本主義の欲望と暴力を抑え込むことができ、100均資本主義の世界的拡がりこそが、国連のSDGs（持続可能な開発目標）の実現にも資するものであると力説する。

第5章「改めて100均資本主義を考える」では、Dのない、人口が減少する（資本主義）時代における人間の正しい生き方、考え方、身に付けるべき知識を整理している。すなわち、「量的豊かさ」よりは「質的豊かさ」を実現するために、身の丈を超えた欲望を戒め、分相応な生活様式、生産様式を追求し、多様性の尊重と異文化理解を重んじながら「リベラルアーツに根差した自分軸」をもつ人間（特に、若者）の増加に期待を寄せている。

最後のエピローグでは、100均資本主義は日本資本主義が自ら創り出した資本主義の新しい姿であり、それは異端の資本主義モデルであるが、人々を資本主義から解放する21世紀の資本主義である、と説く。資本主義でありながら資本主義的価値観とかけ離れた、また資本主義の経済理論では説明できない今日の資本主義が私たちに押しつけているモヤモヤ感を晴らすための生き方として「Going My Way」を提唱している。

3. 評論

以上で紹介したように、本書は私たちの生活に広く、深く根付いている「100円ショップ」の分析を切口にして、日本資本主義の特異性を詳細に説明しながら資本主義生産様式の限界性を明らかにし、また人それぞれの価値観の転換と自由な発想に基づく「人間らしい生き方ができる」21世紀の新しい社会の可能性を提示した、「消費の視点からの21世紀の資本論」であると言える。以下では、本書全体を貫通している著者の見解・主張について二つの質問をぶつけてみたい。

第一は、著者が描いているこの「100均資本主義」は、持続可能な資本主義なのか、という問いである。これは、100均資本主義が依って立つマクロ的社会・経済的環境をめぐる議論になる。

まず、「100均資本主義」と「欲望の資本主義」の関係をどのように理解、認識するか、という問題である。著者は現在の日本経済（資本主義経済）システムを、動く二階建てのバス（p.13）に例えて、100均資本主義（脱成長主義）がその一階部分に当たり、欲望の資本主義（成長至上主義）が二階部分に当たるが、現実において一階から二階への拡張：欲望の資本主義に対するDのない社会からの逆襲がはじまっている（p.121）、と主張している。もし「著者の言う通

り」だとすると、この傾向が続いた場合、資本主義のバスは最終的に止まってしまうのではないかと考えてしまう。

つまり、欲望の資本主義の失敗によって生産性上昇と成長が停滞し、それは労働分配率の低下および賃金上昇の停滞をもたらし、その結果として100均資本主義が広がっていった、と診断している。ここで問題となるのは、100均資本主義における「Dのない」人々（特に若者）が、自ら進んでその生活様式を選択しているのではなく（J.S. ミルが言う「自由意志に基づく自発的な選択」ではなく）、「30年も成長しない、給与が伸びない、これからも変わりそうにない」現実を受け入れての「仕方なく100均で満足する」生活様式を強いられているのではないかと、つまり、「Dがない」のではなく、「希望が持てない」（p.97）ので、Dも持てないのではないかと考えることも可能ではなからうか。

次に、「100均資本主義」の低価格の源泉について考えると、グローバル資本主義（著者の言う欲望の資本主義の姿）の存在なくして100均資本主義は存続しうるのか、という問題である。100円ショップの大量生産・大量仕入れ・大量販売システムが依拠している国際PCM (Product Chain Management) は（pp.45-47）、やはり海外（特に日本よりモノが安く生産できるアジアの国々）への依存度が高く、これから①円安が続く、②東アジア各国における生産コストの上昇（事実、生産要素価格の上昇が続いている）、および③物流コストの上昇（事実、コロナパンデミックや米中覇権争いの先鋭化によってグローバルサプライチェーンも変容している）などの影響を受けて、現在のような「低価格」を維持できなくなる可能性はないか、という問いである。

さらに、100円ショップ（激安ショップ）が有する「究極な人件費削減システム（pp.52-53）」の中核は、非正規雇用の大量使用であり、賃金コストの節約に基づく当該ビジネスモデルは「自らの墓掘り人を生み出す資本主義（p.77）」の究極な事例ではないか。その弊害として国内消費需要の不足、低価格（満足している）志向が強まり、資本主義の拡大再生産（投資）志向の低下、および経済成長の停滞と賃金所得の低下をもたらして100均に代表される低価格商品の需要と市場が拡大する、という資本主義再生産システムの悪循環が形成されていると批判的に捉えることも可能ではないか。

そしてもう一つ、この日本発の穏やかな、足るを知る100均資本主義が、「貪欲と争いまみれのグローバル経済」の中でいつまで存続できるか、という問題である。すなわち、本書が導き出している100均資本主義は、30年も成長が停滞している歪な日本型資本主義経済の小さな一部分であり、さらには日本経済を取り巻くグローバル経済までを考慮すると、「木と森と山」の関係における木の部分として捉えられる。しかし著者も指摘しているように、100均資本主義が依って立つ日本経済（森）は、技術革新を通じた生産性上昇への努力を怠っている故にグローバル経済（山）の熾烈な競争で勝ち目はない（pp.117-118）ならば、その存続も望めないのではなからうか。

さらに、100均資本主義は「定常状態」ではなく、縮小再生産の途上にあるものだというこ
とである。すなわち、100均資本主義は人々が満足できる、幸せな生活様式であったとしても、
経済システムとしては累積的に縮小する（し続けている）のではなか、という問いである。著
者は、日本社会が「物欲が減少した社会＝縮小再生産化した社会＝縮小均衡社会」（p.107）に
突入し、もはや「停滞状態」ではなく、「定常状態」だと考えるのが自然だ（p.114）と指摘し
ているが、低欲望→低需要→低生産性→低賃金→低価格→低利潤→低投資の再生産（循
環）システムは、縮小し続けるしかないのではないか。その上、100均資本主義の下では人口
減少も止められなくなるのではないか、という危惧も生まれる。

筆者も指摘しているように、21世紀の社会において人口増加は必ずしも発展の必要条件では
なく、適正規模が維持できればいいのだ（p.155）が、果たしてそれは可能だろうか。つまり、
Dのない社会で最低・最少を志向する人の増加は人口減少に拍車をかけ、人口規模とその構成
（例：少子高齢化）の悪化が経済状態をさらに悪化させ、人口の再生産までを阻害してしま
うのではないか、という人間社会の存続そのものにかかわる危惧も生まれるのではないか。

第二は、著者が描いている「100均資本主義」は、日本独特な資本主義モデルなのか、それ
ともグローバル資本主義のモデルなのか、という問いである。これを平たく言えば、現在の日
本で広く受け入れられているように「100均でいい」という考えを超えて、グローバル資本
主義の世界（段階）において「100均がいい」と主張できるか、という問題である。

著者が描いている日本発の「100均資本主義」は「100均でいい」という考え方に基づいてい
るようだ。日本の100均資本主義は、日本社会の歴史的、文化的伝統、とりわけ日本社会（人）
の清貧の信条、質素・儉約を重んじる伝統、足るを知るDNAに深く根差しており、この日本
の世界に誇れる社会的道徳心は、「独一無二」の特徴であり、日本ならではのものである。また、
100均資本主義は、現在の日本において「剥き出しの欲望に駆られて成長一辺倒の戦後発展が
もたらした弊害を直視し、失望と無気力感、モヤモヤ感を感じる人が増えている」ことを背景
としている。そして、グローバルな安価な生産・供給網の存在に支えられている100均資本
主義は、長らく世界第二位、アジアの雁行型発展のリーダーであった日本だから構築できたもの
であることも否めないだろう。さらに、100均資本主義は30年以上も続く経済成長の停滞の結
果であり、「30年も成長しなくてもそれなりの生活が維持できている」のはそれ以前の成長と
富の蓄積があってこそ、と思うのが妥当だろう。

このように100均資本主義は、日本（人）の長い歴史と社会経済的状況に強く依存している
ものであり、例えば現在も成長している国と地域、これから成長がはじまろうとする国と地域、
およびその人々たちにとっても適切（必要）な生産様式、生活様式だろうか、という視点も
ありうる。

そして、「100均資本主義」がグローバルな「脱成長主義」の潮流に合流するためには、「100
均がいい」と説く必要があるのだが、それは可能だろうか。例えば、100均生活は環境に優し

いか、という問いがありうる。これに対しては著者も強く意識して多くの論拠を揃えている。すなわち、100円ショップでは環境配慮型商品開発と販売に相当力を入れ (pp.29-32), SDGsに向けた努力をしている (pp.149-153) ことを力説している。しかし、「薄利多売」、「絶えず新商品を開発」、「気軽に使い捨て」、「ついで買い」などの100円ショップ (製品) の特性は、安価であるが故の過剰購買、浪費、廃棄の可能性も秘めているのではないか。これは従来の環境的制約を強く主張する「脱成長論」(ハーマン・E・ディリー、セルジュ・ラトゥーシュ、広井良典、斎藤幸平など) の考え方とは若干異なるのではないかと思われる。

また、「100均資本主義は人間に優しいのか」と考えると、前述のように人間の再生産を阻害している部分が多く、「100均がいい」と主張するには限界もあると感じる。100均資本主義の拡がり、資本主義の「ニューノーマル」、すなわち自由に使える時間、空間、自己実現できる機会の増加 (p.116) をもたらしているが、究極的な問題として「自由に使えるカネがない」この状態が、果たして人間に優しい社会経済システムと言えるだろうか。事実、大西 (2023) も指摘しているように、今の資本主義には人口の縮小を促すメカニズムが強く働いており、いずれは「人口ゼロ」になる運命から逃れない。前項でも言及したが、100均資本主義においても資本主義的人口再生産構造の問題点は解決できず、「100均がいい」と主張するには少し躊躇せざるを得ない。

このように、「100均でいい」の価値観、生活様式の日本での拡がり、は、「100均がいい」の価値観と生産・生活様式を、グローバルな資本主義モデルおよびポスト資本主義のモデルとして推奨、推進するには少し限界があるのではないか、と思うのである。

最後に、少し余談になるが、本書が描いている「100均資本主義」の現実を経済学の巨匠たちが見たらどのような反応をするだろうか、と想像してみよう。

まず、経済学の父であるアダム・スミスにとってこの100均資本主義は、「利己主義、則ち利他主義」の例外に当たるだろうか。すなわち、スミスは『道徳感情論』において、愚かな人の「他人からの評価を高めるために金銭を追求／見せびらかす消費」をする利己的経済行動が、市場経済の消費と生産の増進につながると説いているのだが、Dのない現代人が生きる100均資本主義では自己満足の利己的行動によって経済は縮小していく。おそらくスミスは「これは資本主義の例外だ」と嘆くに違いない。

次に、社会の「定常状態」を最初に論じたジョン・スチュアート・ミルにとっては、100均資本主義は彼が提唱している「His Own Mode」の自由な生き方の実現であるかも知れない。すなわち、ミルは『自由論』において、各々の人間の独自の生き方が望ましいのは、それが最良な生き方であるからではなく、彼自身の方式で生きる道だからである、と説いている。おそらくミルは「100均資本主義の“Going My Way”は、個々の人の生き方としてだけではなく、既に各々の社会経済システムの自由な選択にまで拡がっている」と喜ぶに違いない。

そして、資本主義的 (再) 生産様式を解明したカール・マルクスにとっては、著者も指摘し

ているように「100均資本主義は予想を覆す (p.126)」ものであり、愕然とするに違いない。つまり、資本の自己増殖の本能を喪失=拡大再生産が行われない資本主義の出現は、単なる日本資本主義の機能不全を超えて、資本主義生産様式そのものの退潮および資本主義社会の終焉を意味するのではないか、と思うのである。

参考文献

- アダム・スミス著／水田洋訳 (2003) 『道徳感情論 (上・下)』岩波文庫。
エンゲルス編／向坂逸郎訳 (1969) 『マルクス 資本論 (五)』(9分冊)岩波文庫。
大西広 (2023) 『「人口ゼロ」の資本論——持続不可能になった資本主義』講談社。
斎藤幸平 (2020) 『人新世の「資本論」』集英社。
ジョン・スチュアート・ミル著／関口正司訳 (2020) 『自由論』岩波文庫。
セルジュ・ラトゥーシュ著／中野佳裕訳 (2010) 『経済成長なき社会発展は可能か? ——「脱成長」と「ポスト開発」の経済学』作品社。
トマ・ピケティ著／山形浩生・守岡桜・森本正史訳 (2014) 『21世紀の資本』みすず書房。
ハーマン・E・ディリヤー著／新田功・藏本忍・大森正之共訳 (2005) 『持続可能な発展の経済学』みすず書房。
広井良典 (2001) 『定常型社会——新しい「豊かさ」の構想』岩波新書。

著者リプライ

郭 お二人には非常に丁寧に読み込んでいただき、また私の本の足りない部分を指摘していただき、ありがとうございます。

お二人に共通して指摘されていたのは、環境の問題についてですね。

逆に100均だから、安いから大量に買ってしまって、どんどん捨ててしまうのではないかと。これについては私も相当考えた点であります。やはり一種の使い捨てに近いものなので、結局環境を害したり、最終的に大量消費に繋がってしまったりするのではないかと。

この点について、巖先生にも若干取り扱っていただいたのですが、今100円ショップでは環境配慮型の商品がものすごい増えています。一番使われているのは竹、バンブーです。竹は成長も早いし、いろいろ作って、それをまた今度土に戻すこともできます。また、ストローなども、プラスチックをやめて、バガスと呼ばれるサトウキビのしぼりかすで代替するなどの取り組みが行われています。

資本主義であれ、なんであれ商品を作る限りは、やっぱり廃棄物が出るものです。したがって、3Rと言われるように、リデュース・リサイクル・リユースというものを求める必要があると思います。そして、100円ショップで作られている商品を見ると、環境配慮型商品を生産するという形に徐々に変わりつつあります。

やはり以前に比べると、環境配慮型商品について意識せざるを得ない。消費者にも理解して購入してもらう必要があり、そこでは資源の取奪が生じたとしても、それが環境負荷にならない方向へと向かっており、したがって今は100円ショップもだいぶ変わりつつあるのではないかと考えています。

もう一つお話しすると、100円ショップ的な生活といいますが、今の社会では、メルカリに代表されるように、いわゆるリユースというものが実は広がってるといえます。

自分はこれ以上使わないけれど、他の人が使える、という形で、商品がすぐに不用品となるのではなく、自分の不要な品が他人にとっては有用な商品として生まれ変わるような状況が今かなり拡大しています。その典型がメルカリであったり、ジモティーであり、このような形がみられるのは、安いから簡単に捨てるのではなく、自分にとっては要らないものでも、それを他人が使うという形が広がっているからであると考えています。

この形は、以前まではフリーマーケットなるものが多かったと思います。しかし、フリーマーケットはやはり空間が制約されてしまう。けれども、ジモティーやメルカリは、時間的な制約や地理的な制約を取っ払うことによって、誰にでも欲しいものを提供できます。このような商品の交換・取引が広がっており、新しいその生活様式も実は生まれてきてるんじゃないかとみえています。

また、お二人に共通して言われていたのは、この100均資本主義も、結局は資本主義であり、最後にはどうなるのか、という話であったと思います。

これについては、厳先生が最後に書きながらもあえて言っておらず、また石井先生の話聞きながら思ったことなのですが、私の最終的な主張が何かというと、100均資本主義とは、「究極の利益追求システム」だということです。100円でも儲かるという。新たな経済システム、言い換えれば高付加価値商品を開発し続けなくても豊かな社会を構築できるシステムだと思います。実際には、究極の利益追求システムこそ資本主義の最高の形態=行きつく形態ではないかとすら思えます。「究極の利益追求システム」→「資本主義の最高の形態」というとレーニン『帝国主義論』が思い出されます。レーニンは帝国主義論の冒頭で、帝国主義っていうのは、資本主義の最高の形態だと言っています。そして、その次に向かう社会は何かというと、社会主義です。日本が社会主義に向かっているというと、「何を血迷ったことを言っているんだ」と思われてしまいかねません。もちろん私も今の日本社会が社会主義だなどとは言うつもりはありません。しかし、今の日本社会で起きている出来事を見ると、これが資本主義社会なのかと疑問に思うことが多々あります。

例えば、資本主義経済の前提である生産性の向上を通じた拡大再生産が機能しておらず、長年にわたって低賃金状態が継続しています。それを改善するために、政府が企業に賃金引き上げを求めています。政府が賃金の引き上げ率を決めるのは資本主義では考えられないことです。また、政治(家)に付度して制度を変更したり、はっきりものが言えない状況が続いたり。さらに、政治家が不正を冒しても、責任を取ることなく居座り続け、挙句の果てにはそれでも選挙で当選しまい、「みそぎ」がすんでしまったり。正にジョージ・オーウェルの『1984』の社会を思い起こさせる状況になっています。100均資本主義とは、いま述べたように、経済が拡大再生産しなくても人々が生活できる経済社会のことです。これまでの、成長至上主義=開発主義だけが唯一絶対の価値観だったものに対して、そうではない生き方ができることを明らかにしたものです。新たな経済社会体制を創り上げる方向に向かっている最後は社会主義に行き着くかもしれない。現在の日本経済について、よく停滞といわれていますが、冒頭でも言いましたが、それが30年も続いたらもはや常態化しているといってもいいのではないのでしょうか。ならば、常態化した先には何が待っているのか、それを明らかにすべきです。終焉というよりは、日本は新たな社会に向かっているのではないかと。

これが先ほどの、100均でいいのか、100均がいいのか、という、石井先生からいろいろ指摘された議論に関係します。私は、今の日本社会は、もうすでにそのような方向に向かっており、これは傾向というか、法則なんだと考えています。自然とその方向に向かっているんだと。そのため私はどうしても傾向よりかは法則に近いんじゃないかとみています。政策として進んでいるのではなく、資本主義経済自体が生み出した、新たな形態にその方向に向かっている、という。その結果、日本は今までとは異なる経済社会になるのではないかと考えてい

ます。

このように考えると、成長の概念云々についても、欲望がないというのではなく、別の言い方をするのであれば、もう成熟しきってしまったと言う方がいいのかもしれませんが。みんなそのように思ってしまったから、これ以上のものを欲しがらないという。私が学生からよく聞いたのは、2020年に政府が出した10万円の特別定額給付金を、半年経っても誰も、というかほとんどが使っていないという話です。今聞いてもまだ使っていない学生がいます。

なぜなら、欲しいものがないからという。だからとりあえず貯金しますと。今の日本はもう物が溢れすぎてしまっていて、昔は持っていないから欲しい欲しいだったものが、今はもう足りてしまっているからいらなくなっているようです。昔の人は「足るを知る」と言ったけれども、今の日本の場合には、本当にもう充足しちゃってるからいらない、という社会になっていて、これ以上の新しい商品の想像もつかない状況になっています。せいぜいドローンとかウーバーイーツといったものです、ウーバーイーツはサービスであります。

このように考えると、まさに資本主義自体ももう行き着くところまで辿り着いていて、そこから次の生産様式に向かうことになるのではないかと考えています。

世界中に100均資本主義が広がっていることを考えると、まさにどんどん進んでいます。タイもこれで発展しているというお話もありましたが、タイでも20パーツショップのようなものがあったりして、このような方向へと進んでおり、今後途上国もこのような方向へと向かうのではないかと考えることもできます。

石井先生も先ほど社会変革とおっしゃいましたが、私は、社会変革というよりも法則的に、すなわち労働者が団結しなくても、その方向へ向かってしまうのではないかと考えています。その方向とは成長至上主義から脱却した社会への方向です。ただ、最後は団結しないとドラスティックな変化は生じないかとは思っていますが。

お二人の質問に全て答えると時間がかかってしまうので、私なりに実は書いてないけれども言いたいことを話すと、このような感じです。

全体討論

発言者 巖 成男, 櫻井公人, 郭 洋春, 岡部桂史, 石井優子, 張景瑞

巖 郭先生, 丁寧なりプライありがとうございます。それでは全体討論に移りたいと思います。まず私のほうから, もう少し説明していただきたいものが一つあります。石井先生の話でもありましたが, やっぱり「100均資本主義」の核心である安さというのは, グローバル経済によって支えられているのではないのでしょうか。これをグローバル経済の中の日本という観点から捉えた場合に, グローバルな環境が変化していても, 100均資本主義のシステムや生活様式は維持できるだろうか, という質問ですね。

櫻井 今の質問と関連することで, グローバルな世界全体が変わらずに成長志向である中で, 日本だけ100均資本主義ってものを維持できるのか, という点についての考え方を聞きたいです。

郭 先ほどは十分に話せなかったのですが, 今, アメリカですら99セントショップやワンダラーショップなどが非常に増えていて, そのようなところで買い物をする人たちが増えています。資本主義のチャンピオンであるアメリカの中でも, 今, 地殻変動が起きつつあるといえます。

また, 石井先生が紹介してくれた, こんまりメソッドもアメリカでみられています。アメリカ人は, 大量に物を買うものの, 整理整頓ができず, それらを部屋にぶち込んでしまう。これが, こんまりさんが「これはこういった形で片付けなさい」と言うと, アメリカ人の家が綺麗になってゆく。

このように, 物を大量に買って大量に捨てる, という生活をしている欧米の人たちですら, 今そうじゃない方向に向かう, 向かおうとする人たちが増えています。こんまりさんのような, ちゃんと大事に使えば長持ちしますよ, 生活も豊かになりますよ, という考えが受け入れられつつあるっていうのは, 今グローバルに社会がその方向へと進んでいることを意味していると思います。

加えてもう一つ。私は, 100均資本主義のもとで, 「100円が維持できる」とは思っていません。資本主義は拡大再生産しないと利益を生みません。この100円ショップがすごいのは, まさにあらゆるコストカットをし, 効率性を最大限に追求したという点にあるといえます。その結果, 例えば業界 No.2 のセリアは営業利益率が11%を超えています。このように異常な利益率を上げられるような, 究極の利益追求システムだといえます。

これは, 資本主義のもとで望まれうる最高の利益の上げ方を実践しているわけです。これがもっと中小企業とか大企業にも波及すれば, 今のような, 無駄を残しながらの, いわゆる過剰

生産みたいなのは、減っていくのではないかと考えています。100均資本主義というと、なんだか100円が世界中に浸透するようなイメージを与えますが、そうではなくて、そのような低価格のもとでも利益を上げられるという究極の利益追求システムが広がることを指すものだと思います。また、グローバルにもこのようなものが広がっていくのではないかと私は思っています。

櫻井 世界がまだ依然として成長志向であるようなグローバル資本主義の中において、日本の100均資本主義が維持されるのかという質問に対して、あのアメリカでさえ変わっていき、逆にアメリカがむしろ日本ようになっていくというニュアンスで答えられました。ところが、そうすると、厳先生も別の問いを立てられていましたが、この100均資本主義的なものが日本独自のものなのか、あるいは他のところにもあるのかということを見ると、元から共通点があったのではないかと思います。

もちろん日本の影響を受けてアメリカが100均型になっていったという面も今の段階で結構あると思います。しかし、この小売流通の起源、すなわち一体どこが先なのかというような議論が、流通論の世界では色々展開されています。スーパーは、最初、第1号がどこでできたのかなどですね。色々な議論があるのですが、この100円とかアメリカでのDIMEとか、ペニーとかセントの単位のお店が今出てきたのは、ダラーショップなどの日本の影響を受けていなくて、元々もっと小さい単位での概念的に似たようなものがアメリカ発で出てきました。また、格差が大きくなっているから、底辺層はこういう安いものを求め、それを支えるシステムが必要とされ、それで日本で100均が伸びてきた、という説明だったと思いますが、実は20世紀初頭やそれ以降のアメリカでも同じだったので、似たようなものが出てきたという面もあると思います。

むしろ、全く同じではないので、今のところ、現代のこの時期に100均ショップ、100円資本主義を打ち出された意義はあると思います。ただ、アメリカ的なものとも言えるような気もしています。

また、小売流通の世界では、大概、アメリカで成功したものが、5年10年経って日本に入ってくる。ホールセールショップをはじめ、色々なもののほとんどがアメリカ発であって、それを日本が取り入れるという流れになっています。だから逆向きに、日本独自のものというよりは、アメリカ発のものが行ったり来たりしながら変容しつつ、日本型の受け入れをしたらこんな100均資本主義、100円ショップのようなものになっていた、という議論もできそうだと思います。

日本独自のものというより、グローバル資本主義に共通して格差があり、それに対応する必要のある庶民の生活があり、各国において対応するための仕組みがそれぞれちょっとずつ違いますが、共通点も見られるという建て付けで捉える手もありそうです。このような意見は、厳先生の質問に内包されているでしょうか。アフリカなど、発展途上国の街中での経済というの

は、半分は市場経済とは言えそうもない、盗んできたものを平気で売っているものなど、色々なものがあって、そうやって資本主義から半分外れるような形態も結構あったりします。それぞれにいろんなタイプの対応のための仕組みがありうるということです。

郭 それについて答えるのであれば、私も日本独自とは思っていません。あくまでも日本が初なんです。今回の議論でいうと、日本が最初にその段階に入ったということです。もっというのであれば、これは元々資本主義が持っていたブラックボックスだと思っています。それが今までは出てこなかった、あるいは見落としていた、まだ見ることができなかった。なぜかというところも拡大再生産で問題なかったからであり、その側面が表に出ることがなかった。

ところが、日本のように、もう資本主義が行くところまで行き着いてしまったときに初めて、今まで隠れていたそのブラックボックスが表に出てきた。すなわち、本来資本主義が持っていた側面が、初めて出たのが日本なんだということです。今まではそれを欲望だという形でケインズが説明したり、マルクスはそれが資本の自己増殖過程だとかたかで説明したりしてきた。常に量的な成長だけを言っており、しかもそれは尽きることがないと言っていたものの、それが尽きることがあり、それが尽きると資本主義がそこからどうなるかといった際に出てきたのが、この100均資本主義じゃないかと考えています。

櫻井 巖さんが、レジュメに書いてないのにコロッとすごいことを言われていました。これは消費の面から見た、21世紀の資本論なんだと。だから、欲望だとか何だとかというのはいろんな人が言っているものの、その側面からもう1回資本主義として今の局面を捉え直してみようという試みが、非常に独自の貢献になっていると思います。そこに日本が最初に到達したから、そういうことをやらざるをえなくなり、出てきたんだということです。実際に日本が量的緩和政策を最初にやらないといけなくなったんですが、これは周回遅れなのか、先行していいのか、微妙なところがありますよね。

郭 そこについては、もしかするとちょっと逃げているかもしれないけれども、やはり日本は、色々な政策も含めて頭打ちじゃないですか。衰退国家日本というか。一方では政権はまだまだいけると言っているものの、それはもう全然論外な話であって、ちゃんとしたビジョンを描かないと人々が困ってしまう、苦しくなってしまうと思います。だからこういう100均資本主義の中でも生きられるような側面があるんですよ、そのまま豊かな暮らしをっていうことを目指して、そしてそれが最終的には法則的にそうなるってゆく、ということを目論んでたんです。次の、資本主義に代わる新しい社会に、徐々にソフトランディングし始めているんだと。

その社会というのは日本が高度経済成長期に勝ちとったジャパン・アズ・No.1ではなくて、クリエイティブな部分でのジャパン・アズ・No.1になれるような、そういう可能性もあると思っています。価値創造的なものが中心であって、今の日本社会でみられる、例えばAIを活用したDX社会というものも、実はこの方向で説明できるのではないかと考えられます。だからこそ、古き良き時代に戻って頑張ろうというのではなくて、日本は今そこに注力をすれば

新しいことができると思います。それは一部のエリートとか理系人材に依拠するのではなくて、一般の家庭の方々がそういう社会を作ろうとしているんだと考えれば、そこまで肩肘張らなくても楽に生きられるのではないかということを書いたのですが、そこはある意味で言うところちょっと逃げているかもしれません。

櫻井 お二人が共通して言っている点で、もう一つ、100均資本主義の美しい面を前面に出しているものの、やはり過剰消費や大量消費からの廃棄に繋がりがねない側面もあり、その両面が100均資本主義の中で一緒にまとめられているような気がしています。だから、ファッションといえば、ファストファッションとエシカルファッションが両立することももちろんあり得るんです。ただ、ファストファッションというのは、どんどん捨てていける、毎年捨てちゃえ、というイメージですから、安いわけです。

100円ショップというのも、高いものを買うよりは安いものを買って、どんどん使い捨てるってイメージがやっぱり拭い去れない。だから、もう少し高いものを買って、一生使い続けるとか、親から孫まで3代使うとか、そういうものとは正反対の位置づけにどうしてもなりがちだと思います。なので、そこに何か違いがあるのであれば違いを、もう少しはっきりと出したい。どこかに違いがあるんですよね、私もちょっとわからないですが。

郭 それでいうと、一つはまず、昔の100均は安かろう悪かろうでした。今は、よかろう、最低でもまあまあよかろう、安かろうなんです。例えば私のこの携帯の背面に付ける指を通すためのリング、これも100均で買ったんですが、もう1年ぐらいつと使えています。昔であれば1ヶ月も使えばポロっととれてしまっていたのが今も使えているんです。だから、使い捨てだと言っても、そんなにすぐに使い捨てるものばかりではなくなっているほどに、高品質化しているといえます。

もう一つは、先ほど石井先生がおっしゃったように、エシカルショップも含めて、本当に欲しいものであれば、それに対してはいくらでも払うというのは、100均資本主義でもありうると思っています。でも、見栄を張ってでも買わなくてもいい、自分にとってよければいいというものについては、無理に他人に見栄を張って買う必要はなく、それこそ100円ショップとか、あるいはドン・キホーテとか格安ショップで買う。

こういった意味でいうと、まさに賢い買い方、賢い生活というエシカル消費に、かなり100円ショップは類似性があるのではないかと考えています。別に高いものを買うなど言いたいわけではなくて、本当にいいものであれば、それに対してはいくら出してもいいが、そうでなくて、他人が持っているから自分も買わなければいけない、と見栄を張るわけではないのであれば、安くても、100円ショップででも購入して、オリジナルで持っておけばいいのではないかと。

巖 ただ、そこが私の中で一番、読みながら気になっていたところで、先生がおっしゃるように、高いものも買いたいときには買えるけれど100均で生活しているのではなくて、今の日本の100均資本主義ってというのは、所得が上がらないし、低賃金なのでしょうがなくそこに行

きついているのではないかな、というところで、そこに若干の限界を感じています。

そうではなく、もう少し自由な選択の中で、これだけ物が溢れていて、そもそも欲望がないのであればいいんです。例えば、うちの子どもを見ていても、欲しいものがないんですよ、なんだか欲がないんですよ、私とは全然違って。この世代の人たちがこういう環境で育ってきて、もう十分与えられていて欲がないのであればいいんですが、経済成長していない、所得が減っている、上がらない、これを100均生活が支えている、という論理で説明されると、何かちょっと消極的なイメージで捉えてしまうんですね。

だから、その部分について、もう少し何かポジティブに、100均でいい、じゃなくて、100均がいい、という主張が出ていれば納得できたかな、という気がします。

郭 今巖先生が言われたように、やっぱり前者はあります。先ほども言ったけれども、もう物があふれていて欲しいものがないんです。だから、資本主義全体の傾向としては低欲望なんですよ。でも、低欲望である一方で、人々が生きていくときに、低賃金、低所得であるにもかかわらず、どうやって生きられるんだろうかと考えると、それをいわゆる激安ショップが支えているんです。

もう一つ言うのであれば、低賃金だからこれで我慢している、という人も当然いるだろうけれども、元々そう望まない人たち（贅沢な暮らしを望まない人たち）も今増えていると思っています。それが、半農半Xとか、ダウンシフターっていう人たちです。元々はその人たちも、物が欲しいから一生懸命働く、誰かが持っていて自分も買わなきゃならないから仕事をする。でも、それをやめて、本当に自分が生きたいような生き方をするのであれば、低賃金でも、かつつと同じぐらいの貯蓄ができてしまう、そういった意味で言うと、皆さん心豊かに生活ができています。今、日本だけではなく、アメリカも含めて世界中にそういったダウンシフターと呼ばれる人たちが増えていたりとか、半農半Xの人たちがどんどん広がっていたりというのは、そういうことなのだと思います。

Xというのはまさに、自分の自由な時間を使うことができる人たちが今とても拡大しているということを考えると、ただ別に低賃金で我慢しているのではなくて、低賃金でいいんだと、低賃金でも大丈夫だという、そういう人たちが増えているように思えます。

櫻井 やっぱり、それと100均資本主義というか、100均の世界とは、精神的に重なっているところもあるけど、やっぱり違うと思います。そこを区別した方が、すっきりすると思います。

巖 そこが一番難しいところですね。

石井 先ほど申し上げた、第3階層のところの低欲望が、本来2種類あるのではないかと思います。節約するということ、この安さの中でも生活できる人と、エシカルだったりフェアトレードといったいわゆる意識高い系の、逆に言うと、一つのものに高いお金を払っても構わないけれども、別に物が欲しいわけではなく、環境に優しかったり人権に優しかったり、品質が良かったりするものを選ぶということは、やはり若干違う消費行動ではないかと、非常に感じ

ました。

郭 やっぱりどうしても経済学者ってそれ（欲望がある）を言わないと、経済理論を説明できないんですよ。近代経済学であれマルクス経済学であれ、需要があって供給があるのだから、それ（欲を持たないと）を言われると、経済学という学問自体が崩れちゃうじゃないですか。にもかかわらず、特に今の日本を見ていると、従来の経済理論がほとんどもう通用しない。

だって、安倍政権がやったアベノミクスだって、機動的な財政政策と大胆な金融政策、あれは理論的には間違っていないじゃないですか。ただ、日本という特殊な国だから、あれが全然機能しないんですよ。もっと言うと、大胆な金融政策といっても、結局みんな金持ちだから、今って個人資産が2100兆円あると言われてますよね。

櫻井 ただ、貯蓄ゼロの世帯が2割で、平均では高く見えても、中位はぐっと低くなりますよ。

郭 それでも、一番お金を使えるところがね、それだけの資産を持っていて、さらに企業の内部留保は500兆円、足したら2600兆円もあるのに、結局金利を低くして金持ちにお金を借りてと言っても借りないんですよ。本来、経済学ってそうではないじゃないですか。借りたい人に対して金利を低くしてあげなければならないという理屈や論理なのに、日本の政策の場合には、その人たちじゃなくて上の富裕層を見て政策を作るから、うまく回らないという。となるとやはり、私から言わせると、経済理論が当てはまらない国なんですよ、日本というのは。だからことごとく経済政策が失敗するという。

岡部 100均資本主義というのは、現代日本の資本主義について、別のあり方を示しているように感じます。私は学部の日本経済史の授業で「脱成長神話」批判をすることがありますが、郭先生としては、成長と脱成長のどちらを強調されているのでしょうか。

郭 私がさきほどもちらっと言ったのは、やっぱり二つの資本主義は併存するんですよ、ずっと。その二つとはさきほども言ったように、成長至上主義と脱成長至上主義。それが当分は続きますよ。だから、上を目指したいという人たちがいれば、私はそれを否定しません。それは資本主義の欲望ですから。岡部先生がそれを授業で話されるというのは、やはり私は資本主義がある限りは当然だと思うんです。

でも、拡大再生産を前提とした資本主義だけでは納得しないというか、そこで疑問を持つ人たちが今増えていますよね。それで、今の資本主義をどういう資本主義として説明するかというところで考えたのが、100均資本主義です。僕のゼミ生なんて、今年の夏にゼミ合宿に行ったけれども、ゼミ合宿で泊まっていた宿所に対して、高いですよ、もっと安いところを探さないと、というように、みんなお金を使わないんです。嘘だろう、と思ってしまうようなそんな学生もいっぱいいました。

巖 最後に、せっかくですから、研究会に参加している若い人からも感想を聞いてみましょう。

張 今回先生から書籍をいただいて、一気に読めたんですけども、やはり私の感想と違いますか、考えたこと、感じた点は、先生方のコメントと今の議論の中で、ほとんど全て出尽くしたなと感じています。

私が特に気になっていたのは、100均に支えられた生活というのが、はたして選択したものなのか、強制されたものなのかということなんです。私はどちらかというところ、最近の価値観の変化というのは、価値観が変化した結果として今の状況の変化がもたらされている、とみるべきではないと考えています。そもそも前提としての人口減少や低出産に関する問題もそうですし、この消費に関する問題をみてもそうですが、資本主義である日本社会、日本経済の構造の変化の中で、無意識のうちに強制されて現れてきた人々の価値観の変化であったり選択なのかな、と感じています。なので、2階層に分けられて考えられているというところと、またそこでのそれぞれの消費行動の違い、というのが強調されると、非常に今の日本社会により近づくのかな、と感じました。

また、資本主義の最高の段階だ、という先生の主張には、非常に共感を覚えました。私も日本の社会経済というのが、ある意味社会主義に近いだろうと感じると同時に、ただ、最終的には、人々の価値観が変わっただけでは、そうはならないだろうな、と考えています。既得権益層であったり権力層であったりと、実際にお金を持っている、そのような階層の人々はそのような変化を望むかという望まないわけで、そこでやはり何らかの人々のムーブメントというか、運動というのが、生まれてくる必要があるのではないかなと最近考えていました。その点についてのお話を、あとの懇親会でお伺いできればと思います。

巖 ありがとうございます。まだまだ議論したい事柄がたくさんありますが、もう約束の時間になりました。最後になりますが、郭先生のこの挑戦的な話題作の刊行を心よりお祝い申し上げますとともに、書評を担当してくださいました石井優子先生、研究会に参加してくださいました先生方、皆様に感謝を申し上げ、本日の研究会を終わりにしたいと存じます。どうもありがとうございました。